ロベルト・シューマン

歌曲（リート）

1840 年は「リートの年」として知られ、シューマンはこの年に数多くの歌曲を作曲しました。これらの作品は、詩と音楽の密接な関係を特徴としています。

- **《詩人の恋》Op. 48:** ハインリヒ・ハイネの詩に基づいた全 16 曲の歌曲集で、愛の歓びと悲しみを表現しています。特に「なぜばらは」と「美しき五月に」などが有名です。

ロベルト・シューマンの**《詩人の恋》（*Dichterliebe*）, Op. 48**は、彼の最も有名で愛される歌曲集の一つであり、ロマン派音楽の代表作でもあります。この歌曲集は、1840 年、シューマンの「歌曲の年」に作曲されました。この年、彼はクララ・ヴィークとの結婚の許可を得るために父親と長い争いの末、ようやく彼女と結婚できたことから、特に創作意欲が高まり、多くの歌曲を生み出しました。

背景と作曲の経緯

《詩人の恋》は、ドイツの詩人ハインリヒ・ハイネの詩集「リューヒェル・リーダー」（*Lyrisches Intermezzo*）から 16 篇の詩を選び、シューマンがそれに旋律をつけたものです。ハイネの詩は、失恋や悲しみ、孤独をテーマにしながらも、皮肉やユーモアが混じった独特の作風で知られています。シューマンはこの詩の感情の変化やニュアンスを、音楽で巧みに表現しています。

構成と各曲の内容

《詩人の恋》は全 16 曲で構成されており、詩人の愛の高まりから失望、痛み、最終的には諦念へと至る心理の変遷を描いています。以下は各曲の簡単な内容です。

1. "Im wunderschönen Monat Mai"（「美しい五月に」）
   愛の目覚めを歌う曲。春の到来とともに恋心が芽生える様子を描いています。和声的に未解決の形で終わり、次の曲への期待感を高めます。
2. "Aus meinen Tränen sprießen"（「涙から生まれる花々」）
   愛の喜びを歌い、涙が喜びの花を咲かせるという美しいイメージを表現しています。短くも甘美な曲です。
3. "Die Rose, die Lilie, die Taube, die Sonne"（「バラ、ユリ、鳩、太陽」）
   さまざまな美しいものを恋人にたとえ、その全てが彼女に集約されていると歌う情熱的な曲。
4. "Wenn ich in deine Augen seh'"（「君の瞳を見つめると」）
   深い愛の感情が込められた曲。恋人の瞳の中に平和と安らぎを見出す詩人の心情を描いています。
5. "Ich will meine Seele tauchen"（「魂を浸したい」）
   神秘的で情熱的な曲。恋人の愛の香りに魂を浸し、深い感情を味わいたいと願う詩です。
6. "Im Rhein, im heiligen Strome"（「ライン川、聖なる流れに」）
   宗教的なテーマを持つ曲。ライン川に浮かぶ大聖堂の絵に恋人の顔を見出す詩人の様子を歌います。
7. "Ich grolle nicht"（「私は恨まない」）
   恋人の裏切りを許そうとする詩人の決意を歌った曲。愛の痛みと許しが対比され、強い感情が込められています。
8. "Und wüßten's die Blumen, die kleinen"（「もし花々が知っていたなら」）
   自然界の全てのものが詩人の悲しみを知っているかのように感じる様子を描いた曲。悲しみと孤独がテーマです。
9. "Das ist ein Flöten und Geigen"（「これは笛とヴァイオリンの音」）
   華やかな舞踏会の様子を描きつつ、詩人の内心には悲しみが広がっていることを示す曲。対照的な情景が効果的に表現されています。
10. "Hör' ich das Liedchen klingen"（「あの小さな歌が聞こえると」）
    恋人の歌を聞くことで、再び心の痛みが蘇る詩人の気持ちを歌います。抒情的で悲しげな旋律が特徴的です。

11. "Ein Jüngling liebt ein Mädchen"(「若者が少女を愛している」)
    簡潔なメロディーで、若者の恋愛の儚さと失望を描いた曲。皮肉なニュアンスが感じられます。
12. "Am leuchtenden Sommermorgen"(「輝く夏の朝に」)
    自然の美しさと対比して、自身の悲しみを見つめる詩人の心情を表現しています。メランコリックな雰囲気が漂います。
13. "Ich hab' im Traum geweinet"(「夢で泣いた」)
    深い悲しみが夢に現れる様子を描いた曲。短いが強い感情が込められ、暗い夢のイメージが音楽に反映されています。
14. "Allnächtlich im Traume"(「毎夜の夢で」)
    毎夜の夢の中で恋人に会うことを歌い、その夢が現実ではないと目覚めるたびに悲しみを感じる詩人の心を描きます。
15. "Aus alten Märchen winkt es"(「古い物語から呼びかける」)
    物語の中にしか存在しないような理想の愛と幸せを夢見る詩人の想いを歌った曲。幻想的で夢見るような雰囲気があります。
16. "Die alten, bösen Lieder"(「古い、悪い歌」)
    終曲で、詩人は自分の悲しみを「大きな棺」に閉じ込めてしまおうと決意します。音楽的には非常に壮大で、最後にピアノの後奏が長く続くことで、感情の深さを強調しています。

音楽的特徴

- **詩と音楽の融合**: シューマンはハイネの詩の感情を音楽で非常に巧みに表現しています。各曲の旋律や和声は詩の内容に密接に結びついており、詩の意味や感情が強調されています。
- **ピアノ伴奏の重要性**: シューマンの《詩人の恋》では、ピアノ伴奏が単なる背景ではなく、詩人の内面の感情や風景を描く重要な役割を果たしています。特に最後の曲の後奏は、詩にない感情を表現し、深い印象を残します。
- **感情の幅広さ**: 喜び、期待、痛み、諦念など、幅広い感情がこの歌曲集には含まれています。シューマンの音楽はこれらの感情の移り変わりを巧みに表現し、聴衆に深い共感を呼び起こします。

影響と評価

《詩人の恋》は、シューマンの最も愛される作品の一つであり、ロマン派歌曲の中でも特に重要な位置を占めています。シューマンの詩的感受性と音楽的創造力が結びついたこの歌曲集は、ドイツ・リートの中で不朽の名作とされています。また、この作品を通じてシューマンは、歌曲の表現力を新たな高みに引き上げ、その後の作曲家たちにも大きな影響を与えました。

《詩人の恋》は、詩と音楽が一体となった芸術作品の最高峰の一つとされ、その感動的な内容と美しい旋律は、今もなお多くの聴衆に愛され続けています。

- **《女の愛と生涯》Op. 42:** (*Frauenliebe und Leben*)

作品 42 は、ロベルト・シューマンが 1840 年に作曲した歌曲集です。この年は「リートの年」とも呼ばれ、シューマンが多くの歌曲を作曲した時期であり、彼自身の結婚生活がこの創作意欲に大きな影響を与えました。《女の愛と生涯》は、アドルフ・フォン・シャミッソーの詩を基にした全 8 曲からなる歌曲集で、女性の視点から愛と結婚、家庭、そして死別に至るまでの人生の一連の感情を描いています。

背景と作曲の経緯

1840 年は、シューマンとクララ・ヴィークの結婚が実現した年であり、彼にとって非常に特別な年でした。この結婚に向けた長い道のりと感情の高まりが、《女の愛と生涯》を含む多くの歌曲の作曲に影響を与えました。シューマンは、シャミッソーの詩の中に、結婚や愛に関する自身の経験や期待を見出し、これを音楽で表現しました。

各曲の内容

《女の愛と生涯》は、女性の生涯を通しての愛の変遷を 8 つの詩で表現しています。以下は各曲の内容の要約です。

1. "Seit ich ihn gesehen"(「彼に会って以来」)
   女性が初めて恋に落ちた瞬間を描く曲。彼に会って以来、世界が一変し、彼の

ことしか考えられなくなる様子が歌われます。控えめで静かな音楽が、彼女の内なる喜びと動揺を表現しています。

2. "Er, der Herrlichste von allen"（「彼、すべての中で最もすばらしい人」）
恋する相手を讃える曲。彼の素晴らしさと自分の愛を熱烈に語る女性の姿が描かれています。エネルギッシュで情熱的な旋律が、彼に対する憧れと尊敬の念を表現しています。
3. "Ich kann's nicht fassen, nicht glauben"（「信じられない、受け入れられない」）
自分が愛されていることを知り、信じられない喜びを感じる女性の気持ちを歌った曲。驚きと喜びが交錯する感情が、軽やかなピアノの伴奏と共に描かれています。
4. "Du Ring an meinem Finger"（「指にはまったこの指輪よ」）
婚約指輪を見つめながら、その意味と重みを感じ取る女性の心情を歌った曲。指輪が象徴する愛と誓いが彼女の心に深く響いている様子が、穏やかで美しい旋律に反映されています。
5. "Helft mir, ihr Schwestern"（「助けて、お姉さまたち」）
結婚式の日の準備を手伝う姉妹たちに感謝する曲。彼女の喜びと緊張感が、忙しなくも楽しいリズムの中に描かれています。結婚を控えた幸せな期待感が漂う楽しい曲です。
6. "Süßer Freund, du blickest"（「愛しい人、あなたの目が」）
結婚後の夫婦の親密な会話を描く曲。彼女は妊娠を告げる勇気を持ち、夫と共有する喜びを感じています。深い愛と信頼が、温かく穏やかな旋律に込められています。
7. "An meinem Herzen, an meiner Brust"（「私の胸に抱いて」）
母親になり、赤ん坊を抱く喜びを歌った曲。母親としての幸福感と充実感が、リズミカルで明るい音楽によって表現されています。感謝と喜びに満ち溢れた曲です。
8. "Nun hast du mir den ersten Schmerz getan"（「あなたが初めて私に痛みを与えた」）
最終曲では、夫の死による深い悲しみと絶望を描いています。暗く重い雰囲気が漂い、彼女の心の痛みが鋭く感じられます。曲の最後はピアノの後奏が静かに終わり、物語の終わりを象徴しています。

音楽的特徴

- **旋律の美しさ**: シューマンはこの歌曲集で、感情のニュアンスを繊細に捉えた旋律を用いています。各曲の旋律は詩の内容と密接に結びついており、感情の変化を音楽で巧みに表現しています。
- **ピアノ伴奏の重要性**: ピアノ伴奏は、単なる背景ではなく、感情や物語を補完する重要な役割を果たしています。例えば、夫の死を告げる最終曲では、ピアノの低音が悲しみの深さを強調します。
- **感情の幅広さ**: 喜び、驚き、愛、悲しみなど、幅広い感情がこの歌曲集には含まれています。シューマンの音楽はこれらの感情の変化を豊かに表現し、聴衆に深い共感を呼び起こします。

影響と評価

《女の愛と生涯》は、シューマンの歌曲の中でも特に人気が高く、演奏機会の多い作品です。シューマンの詩的感受性と音楽的創造力が結びついたこの歌曲集は、ドイツ・リートの中でも特に重要な位置を占めており、その美しさと感動的な内容は今もなお多くの聴衆に愛され続けています。

この歌曲集は、愛と結婚、家庭、そして死別という普遍的なテーマを扱っており、特に女性の視点からの感情の変遷が見事に描かれています。シューマンは、個人的な経験や感情を作品に反映させることで、聴衆に深い共感を呼び起こすことに成功しました。

《リーダークライス》(*Liederkreis*)は、ロベルト・シューマンが作曲した 2 つの歌曲集の総称です。どちらの歌曲集も、詩に基づいて作られており、シューマンが愛したロマン主義的な感受性が溢れています。

《リーダークライス》作品 39

1840 年に作曲された《リーダークライス》作品 39 は、シューマンの最も有名で人気のある歌曲集の一つです。この年は「リートの年」と呼ばれ、シューマンが多くの優れた歌曲を作曲した時期であり、クララ・ヴィークとの結婚が決まったことが、彼の創作意欲に大きく寄与しました。

詩の背景

この《リーダークライス》作品 39 は、ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフの詩を基にしています。アイヒェンドルフはドイツのロマン派詩人であり、その詩は自然の美しさや夢想的な世界を描くことで知られています。シューマンはこの詩の中に、彼自身の感情や経験を反映させ、音楽で詩の持つロマンティシズムを表現しました。

各曲の概要

全 12 曲からなるこの歌曲集は、詩の内容や雰囲気に合わせた多様な音楽的表現が特徴です。

1. "In der Fremde"(「異郷で」)
   異郷に住む孤独な男の心情を描いた曲。彼は故郷を思い、いつか訪れる死によって永遠の安らぎを得たいと願っています。ピアノの伴奏が、彼の孤独感と憧れを表現しています。
2. "Intermezzo"(「間奏曲」)
   愛する人との再会を夢見る男の心情を描いた曲。軽やかで流れるような旋律が、彼の希望と期待感を表現しています。
3. "Waldesgespräch"(「森の対話」)
   森の中で魔法の力を持つローレライと出会った男の物語。ドラマチックな展開が特徴で、ローレライの不思議な力が音楽によって描かれています。
4. "Die Stille"(「静けさ」)
   静かな自然の中で心の平穏を求める男の心情を描いた曲。ピアノの穏やかな伴奏が、静かな自然の美しさを表現しています。
5. "Mondnacht"(「月夜」)
   月夜の美しさを描いた詩に基づくこの曲は、夢幻的で詩的な雰囲気が漂います。月の光に照らされた夜の情景が、美しい旋律によって表現されています。
6. "Schöne Fremde"(「美しい異郷」)
   異郷の美しい自然を見つめる男の心情を描いた曲。異国の地での感動と新鮮な驚きを音楽で表現しています。
7. "Auf einer Burg"(「城の上で」)
   古い城の塔での静かな情景を描いた曲。城の中にいると感じる孤独感と静けさが、重々しい音楽で表現されています。

8. "In der Fremde"(「異郷で」)
   最初の曲と同じタイトルの詩に基づいていますが、内容は異なります。異郷で感じる孤独感と故郷への憧れが歌われています。
9. "Wehmut"(「憂愁」)
   自然の美しさの中に隠された悲しみを感じる男の心情を描いた曲。彼の心の中にある深い憂いが、静かな旋律で表現されています。
10. "Zwielicht"(「薄明かり」)
    夕暮れ時の不安定な感情を描いた曲。薄暗い光の中で感じる不安感が、緊張感のある音楽で表現されています。
11. "Im Walde"(「森の中で」)
    森の中で感じる神秘的な雰囲気を描いた曲。自然の中での驚きと喜びが、リズミカルな音楽で表現されています。
12. "Frühlingsnacht"(「春の夜」)
    春の夜の喜びと新しい始まりの予感を描いた曲。明るく希望に満ちた旋律が、春の訪れを告げています。

音楽的特徴

- **ロマンティックな旋律**: この歌曲集は、シューマンのロマン主義的な感受性を反映しており、詩の情感を音楽で豊かに表現しています。旋律の美しさと詩との調和が特徴です。
- **ピアノ伴奏の重要性**: ピアノ伴奏は、詩の情景や感情を補完し、聴衆に深い感情的な体験を提供します。特に「Mondnacht」では、ピアノの柔らかな音色が月夜の静けさを見事に表現しています。

《リーダークライス》作品 24

こちらは、ハインリヒ・ハイネの詩に基づく 9 つの歌曲からなる歌曲集です。作品 39 に比べて短いですが、シューマンの作曲技法と詩的感受性が詰まった作品です。1840 年に作曲され、作品 39 と同様に愛と失恋、孤独、憂いといった感情を描いています。

各曲の概要

1. "Morgens steh' ich auf und frage"（「朝、私は起きて問う」）
   朝起きて、愛する人のことを思いながら問いかける詩に基づいた曲。希望と不安が交錯する心情が描かれています。
2. "Es treibt mich hin"（「心が揺れる」）
   愛する人に対する情熱的な思いを抑えられず、心が揺れる様子を描いた曲。リズムの激しさが感情の揺れ動きを表現しています。
3. "Ich wandelte unter den Bäumen"（「木々の下を歩いていた」）
   木々の下での孤独な散策を描いた曲。自然と一体になりたいという願望が、静かな音楽で表現されています。
4. "Lieb' Liebchen, leg's Händchen"（「愛しい人よ、手を」）
   愛する人に手を差し伸べてほしいと願う詩に基づいた曲。親しみやすい旋律と穏やかな伴奏が特徴です。
5. "Schöne Wiege meiner Leiden"（「私の苦しみの美しい揺りかご」）
   愛と苦しみが交錯する心情を描いた曲。揺れ動く感情が、メロディーの変化に表現されています。
6. "Warte, warte, wilder Schiffmann"（「待て、待て、荒々しい船乗り」）
   激しい感情を表現した曲。荒れた海の中での葛藤が、音楽で描かれています。
7. "Berg' und Burgen"（「山々と城」）
   自然の中での感情の高まりを描いた曲。ピアノの伴奏が風景を描写し、壮大な雰囲気を生み出しています。
8. "Anfangs wollt' ich fast verzagen"（「最初は絶望しかけていた」）
   絶望と希望の間で揺れる感情を描いた曲。旋律の変化が、彼の心の葛藤を表現しています。
9. "Mit Myrten und Rosen"（「ミルトとバラを持って」）
   最終曲では、花と共に愛する人のもとへ行きたい